

指定討論2
「高大接続の視点から」
 両角 亜希子
 (大学経営・政策コース)

私は高等教育について研究しています。本日は高大接続の観点から、あるいは大学での教育や経営などを研究している観点から、幾つか気付いたことをコメントしたいと思います。

1.全体的な感想

全体的な感想

- ▶ 実践に基づいた、各教ステージにあった形での具体的なカリキュラム提案→非常に興味深い
- ▶ 中等教育と高等教育の垣根が非常に低くなる提案
 - ▶ かつて: 高校までは既存の知識を学ぶ→大学では既存の知識を疑ってみる。大きな断絶。→大学での初年次教育
 - ▶ 修得(知識&考え方)と探究の両方をもつ高等教育
- ▶ 高等教育側も変化
 - ▶ 「高等普通教育」「学校化」
- ▶ 社会の変化の影響を共通に受けている面
- ▶ 非常に近い実践が模索

図1

いずれのユニットも実践に基づいて、しかも、それぞれの教育ステージにおける具体的なカリキュラムが提案されていて、非常に興味深く拝見しました(図1)。一番強く感じた印象は、中等教育と高等教育の垣根が非常に低くなるような提案だったことです。かつては、高校までは既存の知識を学び、大学に入るとちょっと変わった先生たちから既存の知識自体を疑うことを学んでいたもので、非常に大きな断絶があり、学生が戸惑うことがありました。そのため、どのようにして大学での学びに入ってもらおうかということに、大学としては神経をとがらせていた面もありました。

また、今回の発表では習得と探究という話が出てきましたが、高等教育の教育内容にはその両面が含まれているところに特徴があると思います。例えば法学部の先生などは、知識よりもリーガルマインドを身につけてほしいとよく言いますが、そういう一定の考え方を身につける習得ということを重視して、高

等教育では授業を行っています。また、それと同時に探究という研究活動も重視しています。高等教育の場合は中等教育段階と比べて年齢も高くなってきているので、先生から強制されて学ぶのではなく、自主的・自律的に学ぶようにならなければいけません。いろいろなタイプの学習形態が用意されているのが高等教育の学習だと思っていたのですが、今回、中等教育カリキュラムの新たな案を見て、非常に近い考え方が入ってきたという気がしました。

もちろん高等教育側も変化しています。大学などに多くの学生が進学する状況について「高等教育のユニバーサル化」や「高等普通教育化」などを言う先生もいますし、大学によっては担任をつけるなどして学校のようになっているところも結構あって、高等教育側が中等教育に近づいている面もありますが、非常に近い実践が行われています。例えば、講義で一方的に教えているだけだと知識の定着率が悪いので自分でやらせる、あるいは、他の人に教えさせるなど、より定着度が上がるようなアクティブ・ラーニングを入れています。また、自治体や企業と協力しているいろいろなプロジェクトの中で学習するといったことが高等教育では非常に盛んに行われていて、とても近い問題関心だと感じました。

(参考) ハーバードの前学長の教育改善提案

- ▶ Our Underachieving Colleges (2005年)、Bok学長の著書
- ▶ 学生課程教育の8つの目標と現状・改善の必要性
 - ▶ ① コミュニケーション能力 (Learning to Communicate)
 - ▶ ② クリティカルシンキング (Learning to Think)
 - ▶ ③ 人格形成 (Building Character)
 - ▶ ④ 市民生活の準備 (Preparation for Citizenship)
 - ▶ ⑤ 多様性との共存 (Living with Diversity)
 - ▶ ⑥ グローバル社会への対応 (Preparing for a Global Society)
 - ▶ ⑦ 幅広い興味を獲得 (Acquiring Broader Interests)
 - ▶ ⑧ 職業キャリアへの準備 (Preparing for a Career)

図3

こうしたことは、学力レベルの低い大学だけでなく、学力レベルの高い大学でも非常に大きな課題になっています。ハーバード大学の前学長の Derek Bok は、学生が社会で生きていく上で必要な八つの事柄について、アクティブ・ラーニングやサービス・ラーニング、短期留学など、いろいろな学習をさせて身につけさせなければならないと述べ、教育改善を

提案しています(図3)。超エリート大学でも、このような共通の意識で大学改革が行われているということです。

2.論点の整理

論点①:新カリキュラムが教員に与える影響

論点①:新カリキュラムが教員に与える影響

- ▶ 非常に魅力的だが、新たな挑戦も含むカリキュラム
 - ▶ メタ学習、生き方学習、社会参加の学習をいずれも総合的学習の時間で学ぶと同時に、各教科の中にもそうした要素を取り込む
 - ▶ クロスカリキュラムの提案(数学と理科、国語と英語等)
- ▶ 多忙を極めている学校の先生たちに対して、新たな知識や技能はどの程度、求められるものなのか。
 - ▶ 各ユニットでの実践からのコメント
 - ▶ 参加された附属の先生方からのコメント
- ▶ 教員の技能の差は出てこないのか。
 - ▶ たとえば、大学の初年次教育で、共通の目的をもった探究学習(初年次ゼミ)が多くの大学で実践されているが、共通テストやFDをしたところで、教員による差が大きいという学生の不満は大きい。

図4

まず、今回の研究目的は、新たなカリキュラムを提案することです(図4)。どれも非常に魅力的でしたが、結構チャレンジングな内容も含むのではないかと思います。学校の先生方はすでに非常に多忙だと聞いていますし、実際に附属の先生方と一緒に研究をさせてさせていただいて、本当に忙しいということを見て感じていたのですが、ここで提案されたものは、現場の先生方にどれぐらいの負担や新たな知識・技能を求めるものなのでしょう。カリキュラムとして多くの学校に導入していくのであれば、ちょっとした視点の転換と工夫でできるものなのか、学習指導要領等を改正しないままできるのか、あるいは研修などはどこまで必要なのかといったところまでを考慮に入れた上での提案が望ましいと思います。そのため、このような質問をさせていただきました。

また、附属では卒業研究などの活動を熱心になさっていますが、このようなことができるスキルは学校ごとに差があるのか、あるいは先生による差はないのか。国内の多くの大学においても、例えば初年次教育でいろいろな探究学習をさせようとしているのですが、先生による差が大きいという意見がどの大学でも出ています。素朴な疑問ですが、もし分かれば教えていただきたいと思います。

- ▶ 基本的に「増やす」提案がなされるが、教員数を増やせないのであれば、何かを減らす必要性はないのか/可能なのか。
- ▶ 大学側の高校への不満
 - ▶ 「高校の到達度の低下」
 - ▶ 「高校の内申点の信頼度の低下」
 - ▶ 「高校での未履修問題」

図5

また、最初の市川先生のお話で、新しいものを増やすのではなく、既存のものをうまく生かしていくということをおっしゃっていて、私も非常に良い考えと思いました。ただ、それ以外は、基本的に教育内容や教育時間を「増やす」提案のように見えました。教員数を増やせないのであれば、何かと置き換えたり、減らしたりすることも併せて考える必要があるのではないかと思います(図5)。大学教育の現場でも、大学になじむために初年次にもゼミをすることになり、1年生と3~4年生はきめ細かくやっている、けれども2年生は放置されている、「では今度は2年ゼミだ」というように、どんどん新たな科目が増えていく傾向にあります。新しい取り組み自体は大変意義があるのですが、大学によっては既存の授業負担を変えないまま、新たなものをどんどん入れていくので、先生たちが一つの授業にかける準備時間が非常に短くなってしまい、授業の密度が低くなるという問題がいろいろな大学で出ています。ですから、新しいものを提案するときに工夫できる点について、何かあれば教えていただけたらと思います。

一方で、大学側もそれぞれ勝手なことを言っています。学長と話をしても、高校に対する不満が出てくるものです。例えば国立大学の先生がよく言うのが、高校の到達度の低下について、これは初年次の問題ではなく高校教育の問題が大学に持ち越されただけだということです。また、私立である程度、競争率が高く、推薦入試を導入している大学では、高校の内申点の信頼度の低下を指摘する先生方もいます。あまり多くはないのですが、国立の一部で

長は3割程度です。また、今は意欲も評価すべきだということが非常によく言われていますが、そもそも入試を工夫することで学習意欲の高い学生を増やせると思うかと聞いたところ、6割の学長は「増やせる」、4割は「増やせない」と回答しました。もちろん、私学で定員割れしているところは、学生を選んでいる場合ではないので「増やせない」という回答が多かったのですが、国公立や、倍率が高い、いわゆる有名大学の私学の学長にも、それについて非常に疑念を示している方が多い結果でした。それは大学教育の問題だとか、できるかもしれないけれども時間とコストを考えると現実的ではない、数十人単位ならできるけれども数千人規模の大学ではできない、あるいは、実際にそのつもりでAOを実施してもうまくいかないことが多いといった否定的な見方をする先生もいれば、「増やせる」と信じている先生もいて、大学側では賛否が分かれています。

今回は、教科でも既存の学力以外のものを育てるというカリキュラムの提案でしたが、それは入試で問う必要があるのかどうかということ自体も一つの論点になるのではないかとということで、挙げさせていただきました。

論点④：進路指導から「生き方」学習へ

論点④：進路指導から「生き方」学習へ

- ▶ 一部だが、いきすぎた進路指導・キャリア教育
- ▶ 一部の高校の進路指導で、具体的な職業イメージを持たせて、入れる学部に入學させ、入学後の不適応が問題になっている大学が多い。軌道修正がしにくい学部・大学を選んだ場合は、生徒・学生にとって大きな悲劇。(大学の就職指導でも同じような問題は起きているが…)
- ▶ その原因の一端は、大学入試において、細かな学部・学科単位で募集をして(無理やり選ばせる)、志願者増をねらい、毎年のように、入試改革をやりつつける大学側にもある。
- ▶ 実際に、高校の先生はとても情報や理解が追い付かずに、進路相談のコンサル等をいれている状況があるという。
- ▶ 高大が協力して、改善すべき観点で、「生き方の学習ユニット」の提案、非常に参考になる。

図9

附属は全く違うタイプだと思っていますが、一部の高校では非常に具体的な職業イメージを持たせて、それを前提に学部・学科を選ばせるという進路指導がなされ、入学後の不適応が問題になっている大学が多くあります(図9)。先ほどのリクルートの調査

では、65%の学長が大学教育と学生 mismatches を課題と感じていると回答しており、大きな課題となっています。しかし、特に軌道修正がしにくい大学を選んだ場合は学生にとっては大きな悲劇になりますが、その原因は高校側ではなく、むしろ大学の側にある気がしています。進路がきちんと定まっていな生徒に非常に細かな学部・学科単位で募集をかけて、その時点で無理やり選ばせるという複雑な入試制度を採用している大学側が悪いと思います。高校の先生も、入試がどうなるかは分からないので、塾やコンサルの方に進路相談に入ってもらっている状況があるそうです。細かな進路指導をするよりも、もう少し柔軟性のある進路指導や生き方指導を入れるということ、大学教育の側としては強く言いたいと思います。そういう意味で、「生き方の学習ユニット」の提案は本当に深いものだと思います。

柔軟性ある進路・キャリアの明確化の効果

- ▶ 大学生の進路・キャリアの確定度合い
- ▶ スライド11:
 - ▶ 現実のデータを見ると、大学1年生で、将来が確定していない学生がマジョリティである。
- ▶ スライド12、13:
 - ▶ 重要なのは、獲得>継続の関係。継続(大学にやりたいことがあって入学しても、大学教育で何らかのインパクトを受けなかった学生)よりも、獲得(大学入学時にやりたいことはなかったが、大学自体に何かを得たと実感できた学生)の方が、獲得した能力、職業生活での満足度が高い。
 - ▶ どこかの時点で、無理やりに具体的な職業希望を選ばせるのではなく、それぞれの時点で模索し、一定の選択をしつつ、努力する柔軟な姿勢が重要なのではないか。

図10

大学1年生の大学生活の目標

自分の将来の方向見つける【在学中の目標】

| 目標 | 割合 |
|----------------|-----|
| 専攻でやりたいこと | 36% |
| 専攻以外の分野でやりたいこと | 37% |
| 専攻以外の分野でやりたいこと | 17% |
| 専攻以外の分野でやりたいこと | 10% |

大学の授業とあなたの関係

| 関係 | 専攻分野でやりたいこと | 専攻以外の分野でやりたいこと |
|------------|-------------|----------------|
| ある程度はあてはまる | 76.0 | 21.2 |
| 当てはまらない | 45.0 | 25.2 |

偏差値によって大きく傾向は変わらない。

東京大学入試センター「中国入試調査」19年版
http://www.tsinghua.edu.cn/

図11

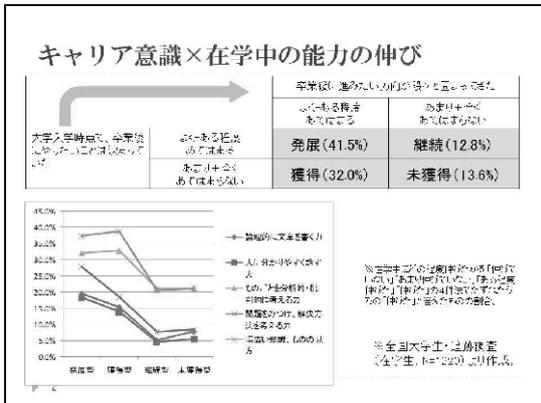


図 12

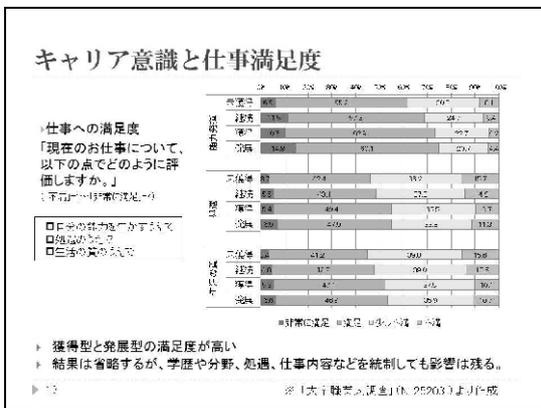


図 13

私どもが以前、大学生約5万人対象に行った「全国大学生調査」によると、大学入学時点で将来の方向性が確定していない学生がマジョリティでした(図10-11)。また、大学にやりたいことがあって入っても、大学教育で何のインパクトも受けなかった学生は、大学教育で得るものも少なければ、その後の職業生活もあまりうまくいっていないようです。やりたいことを見つけて、さらにそれを深める人や、やりたいことがなくても大学自体に何かを得た人の方が、獲得した能力や職業生活の満足度が高いという結果が出ています(図12-13)。高校が最後の段階だと思わずに、もう少し柔軟に、長い視点で考えてもらいたいと思っています。

論点⑤：新カリキュラムは、大学にどのような変化を求めるのか

論点⑤：新カリキュラムは、大学にどのような変化を求めるのか

- ▶ すでに高校段階で主体的な学習に力を入れている学校も増えているが(総合学科等)、大学側は意外とそうした動きを十分に把握していない。
- ▶ そうした高校の話や聞くと、大学へのスムーズな移行というより、「大学の初年次教育で同じようなことをまたやらされる」といった声もある。
- ▶ また、社会参加の学習など、現在、大学でも同様のことが課題となり、実践されている内容も多く、よい形で連携・協力することで効果が高められる可能性も感じた。
- ▶ もし、新カリキュラムが実現した場合、大学をはじめ、高等教育機関がどのように変わることでよりよい接続が生まれるのか、もしご意見や要望があれば、最後に教えていただきたい。

図 14

最後の論点は、新しいカリキュラムが実際に導入された場合に、大学側にどんな変化を期待するのかということです(図14)。今までの論点は、どちらかというとう大学の現場で問題になっていることでしたが、こちらはむしろ逆です。まず、大学側は、高校段階で行われている取り組みについて十分把握していません。私も東大の教員になって初めて、附属で卒業研究というユニークな学習が行われていることを知りました。そのため、「高校段階でそうした面白い教育をしていけば、大学教育とのギャップはあまり問題になりませんね」と高校の先生に聞くと、「初年次教育と同じようなことばかりさせられて迷惑です」と逆に怒られたりすることがあるのです。ですから、新たなカリキュラムが定着していったときには、入試だけでなく、大学教育がどう変わっていけばもっとうまく接続できるのかという提案が高校側から出されると非常に面白いと思います。

まとめ・閉会挨拶

大桃 敏行

(附属中等教育学校長・学校開発政策コース)

3年間の計画で研究課題を進めてきたカリキュラム・イノベーションは、今年が最終年度で、今日が最後のシンポジウムとなりました。最初のシンポジウムのときに、私は「今の学校教育は学問の言いなりになっている」というような言い方をしたかと思っています。